

愛知県常滑市（国内 22 例目）の高病原性鳥インフルエンザ発生農場に係る
疫学調査チームの現地調査概要

令和 7 年 1 月 10 日に実施した現地調査により、以下のことを確認した。

1 基本情報

用途（飼養羽数）：採卵鶏（13.5 万羽）

発生家きん舎の構造：セミウインドウレス鶏舎

発生家きん舎の飼養形態：ケージ飼い（直立 7 段ケージ 6 列（1 階 3 段、2 階 4 段）、通路 4 本）

2 農場の周辺環境・農場概況

- ① 当該農場は、海沿いの平野部にある養鶏団地の一角に位置する。養鶏団地の周辺は収穫済みの水田に囲まれており、二番穂が出ているところもあった。
- ② 当該農場は、1 月 2 日に発生が確認された今シーズン国内 17 例目発生農場（愛知県 1 例目）と同じ養鶏団地内にあり、同農場と敷地が近接していた。
- ③ 当該農場には鶏舎 7 棟、空舎 1 棟（倉庫として利用）、堆肥処理施設（堆肥舎、発酵ハウス、乾燥ハウス、製品保管庫がそれぞれ独立）、集卵施設、倉庫、従業員更衣室で構成されていた。
- ④ 鶏舎 7 棟のうち 5 棟はセミウインドウレスの成鶏舎、2 棟はウインドウレスの育成舎であった。なお、当該農場には敷地を南北に分けるように公道が通っており、北側には成鶏舎 5 棟、南側には育雛舎 2 棟が存在した。発生鶏舎は、北側の敷地内にあるセミウインドウレス鶏舎（成鶏舎）のうちの 1 棟であった。

3 通報の経緯・発生時の状況

- ① 農場主によると、発生鶏舎（通報時約 714 日齢）では約 3 万羽の採卵鶏が飼養されており、1 日当たりの平均死亡羽数は 3 羽程度であったとのこと。
- ② 農場主によると、1 月 9 日午前中の健康観察の際、鶏舎北側の前室近くにある直立 7 段ケージの下から 5 段目のケージ付近で固まって死亡が見られ、通常時の死亡の様子と明らかに違ったため、家畜保健衛生所に連絡したとのこと。なお、発生前には産卵率低下、食欲減退などはみられなかったとのこと。
- ③ 調査時、通報のあった発生ケージ付近で衰弱鶏が確認された。非発生鶏舎では特段の異状は認めなかった。

4 管理者及び従業員

- ① 当該農場には農場主を含め従業員が 12 名おり、うち 6 名が鶏舎管理、残り 6 名が集卵作業を担当しているとのこと。なお、鶏舎管理を行う従業員については担当鶏舎が決まっており、5 名は成鶏舎を担当し、残り 1 名は育雛舎を担当していた。
- ② 農場主は、同じ日に成鶏舎と育雛舎に立入ることがあるが、成鶏舎への立ち入りは育成舎の後としており、成鶏舎に立ち入った後は育成舎へは立ち入らないとのこと。
- ③ 鶏糞の運搬作業は、農場主と成鶏舎の担当従業員が行っていたとのこと。

5 農場の飼養衛生管理

- ① 当該農場は公道で敷地が分かれており、それぞれの敷地ごとに衛生管理区域が設定されていた。衛生管理区域の入口は 4 か所あり、それぞれ立入禁止看板や、三角コーン及びチェーンが設置されていた。
- ② 農場長によると、衛生管理区域に外部車両（集卵業者、飼料運搬車、廃鶏搬出業者等）が入る際は、北側エリアの南側入口に設置された動力噴霧器で消毒を実施して

いるとのこと。なお、外部車両入場時は、当該農場の専用フロアマットを使用し、専用長靴を使用していたとのこと。

- ③ 従業員が出勤する際は、公道の南側の衛生管理区域外の駐車場に車を止め、駐車場前にある更衣室で衛生管理区域専用作業着及び長靴を着用しているとのこと。その後、北側及び南側それぞれの衛生管理区域入口で手指消毒を実施しているとのこと。
- ④ 従業員が北側の衛生管理区域に行くには公道を渡る必要があり、区域入口では踏込消毒槽による消毒を行っていたが長靴の交換は行っていなかった。なお、従業員が育成舎のある南側の衛生管理区域から成鶏舎のある北側の衛生管理区域に行く際には、作業着の交換を行っていたとのこと。
- ⑤ 農場主によると、従業員が鶏舎に入る際は、鶏舎出入口で鶏舎内専用長靴に履き替え、踏込消毒（塩素系消毒薬、約4日毎又は汚れたら都度交換）及び消毒スプレーで手指消毒を行っているととのこと。鶏舎内で作業を行う際は手袋を着用しているが、ほぼ毎日洗濯したものを鶏舎に持参して使用しているとのこと。
- ⑥ 農場主によると、従業員、重機、器具については他農場と共有していないとのこと。
- ⑦ 飼料タンクの上部には蓋が設置されており、閉鎖系ラインを通じて鶏舎内に供給されていた。飼料運搬業者の直近の搬入は1月9日であった。
- ⑧ 給与水には、消毒済みの井戸水を使用しており、水質検査を年1回行っているとのこと。
- ⑨ 集卵コンベアの鶏舎出口は地上2m程度の高さに設置されており、コンベア上部及び側面はカバーで覆われていたが、下部にはカバーはなかった。なお、発生鶏舎の集卵コンベアの鶏舎出口には蓋が設置されていた。
- ⑩ 鶏糞は、除糞ベルトにより舎外に搬送され、ダンプカーに直接積み込まれるようになっていた。なお、非発生鶏舎外のベルトコンベア出口下部には小動物が侵入可能な隙間が確認されたが、発生鶏舎のベルトコンベアでは隙間は確認されなかった。
- ⑪ 除糞作業は、毎日1鶏舎ずつ、農場内の堆肥舎まで搬出する作業を行うとのこと。なお、成鶏舎から自農場の鶏糞置場に搬出する際、通常は農場東側の公道を利用していたが、隣接する愛知県1例目発生農場で本病が発生して以降は、埋却地との位置の関係から、愛知県1例目農場の敷地や埋却地に面したルートは極力使用せず、自農場内の堆肥舎に再び入る迂回ルートを使用していたとのこと。
- ⑫ 死亡鶏は毎朝の健康観察時に回収し、放置せず速やかに焼却炉で焼却しているとのこと。また破卵等の廃棄卵は集卵庫に一時保管し、発酵ハウスで鶏糞に混ぜて処理するとのこと。
- ⑬ 当該農場では、鶏舎によってロット管理が異なっており、鶏舎管理でオールイン・オールアウトを実施する場合や、ケージのライン単位で導入・出荷を行う場合があるとのこと。
- ⑭ 発生鶏舎内部は全体的に埃が堆積していたが、特段の破損箇所や隙間は見受けられず、ラットサイン等の小動物が侵入した痕跡は見られなかった。発生鶏舎に隣接する鶏舎では、壁の断熱材等に小動物のかじり跡や、殺鼠剤付近でネズミの死骸が確認された。
- ⑮ 周辺の農場での鳥インフルエンザ発生を受けて、野生動物誘引防止のため、よりすみやかに死鶏を回収し、焼却処理するように対策を実施した。
- ⑯ また、近隣発生農場からの伝播を防ぐため、飼養衛生管理区域へ出入りする必要がある車両は、発生農場およびその防疫措置エリアを迂回して出入りしていた。

6 野鳥・野生動物対策

- ① 農場周辺の林では、ムクドリ、ハクセキレイなどの野鳥が複数見られ、多数のカラスを確認した。また、農場敷地内においてもハクセキレイ、スズメを複数確認した他、成鶏舎の周囲では野良猫を複数確認した。

- ② 農場長によると、鶏舎内でネズミを見ることがあり、夏場にはハエを見ることがあるとのこと。ネズミ対策のため、殺鼠剤を月1に回程度設置しているとのこと。

(以上)